



無人島「ロザリオ藍覧土」で島おこし。

天草郡有明町のヒットアイデア

ロマンの島天草に新しいキャンプ場が誕生しました。

暑さの厳しかったこの夏、天草郡有明町の一角に小さなキャンプ場が誕生しました。

その名もロザリオ藍覧土。ギリシヤンの歴史をもつ天草を象徴するよいうなすてきな名前のキャンプ場です。このキャンプ場は、天草国立公園指定の島々の一つ、竹島という無人島にあります。

人は誰も、無人島という言葉の響きに限りなくロマンと憧れを抱く時があるのではないのでしょうか。

私もはじめて訪れる無人島にワクワクする思いで瀬渡し船に乗りこみました。ほのかな潮の香を含んだ涼風を身体いっぱい受けながらわずか三分程の船旅。着いた所は、意外に小さな島でした。

行政主導型でなく、地元の自発的な取り組みが功を奏したようです。

このキャンプ場の特色を一口で言いますと、「なあ〜んにもない」ということです。まず、電気がない。水道がない。売店がない。にもかかわらず七月一日のオープンから八月末までの二カ月間に約三千人の人々がこの島を訪れました。

その魅力とは一体何なのでしょう。この無人島を切り開き、人工海岸をつくり、キャンプ場として生まれ変わらせた関係者の方々に、そもそもその動機からうかがってみました。有明町には、会社社長、青年団員、あるいは歯科医師等、様々な職業の方十一名で構成する興友会というボランティアグループがあります。常々、「自分たちの町は今のままではいけない、何とかしなければ」と



Rosario Island

町の将来を憂い、話し合いを重ねてきました。過去一、二回開催された「天草島おこしシンポジウム」でも積極的に勉強してきました。そして具体的な行動に移ろうとしたとき、目に止まったのが竹島開発です。五年間、有明町大浦の「明日を考える会シンポジウム」に講師としておみえになった大学教授が、「この島は何か活用できそうだね」とアドバイスされたのがきっかけでした。竹島開発には、興友会のメンバーの他に地元の漁業後継者六名が加わりました。従来の行政主導型ではなく、地元民が自発的に取り組んだ点、実にすばらしい試みだと思います。



天草島おこしグループの大同団結 島援隊の結成も間近です！

さて、興友会は全く、無の状態からロザリオ藍覧土をつくったわけですが、天草地区にはこうした住民主体の島おこしグループが、二市十三町にわたって出現しています。そして、これらのグループは、天草全体を考える会として団結しようとしているということなんです。名前は「海援隊」をもじった「島援隊」。正式の結成はまだですが、すでに「島援隊」の名で東京のデパートで開かれた物産展などに出席、「天草」を売り込み、注目を浴びました。また、北海道の地域づくりの視察に十名程度派遣したり、各町で住民参加の夏祭りを企画したり、なかなか積極的です。大矢野でお会った島援隊関係の方も、「ロザリオ藍覧土は、これからの島おこしの流れの一つです。他の地域の人々も関心をもっています」ととても熱心です。

天草は、大部分の地域で離島振興法の指定が解除されています。当然、厳しい自立の道を歩いています。島おこしの意識が、住民の一人ひとりに浸透している様子に、これから天草は、いろんな意味でもむしろかなりそうな期待を感じました。



ママさん特派員
古賀結美子さん

自然の中での不自由な生活が、人間らしさを思い出させてくれます。現在、漁業後継者六名が交代で運営にいたり、松本国雄さん（元PTA会長）が一人で管理をしています。もちろん有志で始めた事業、資金も潤沢ではありません。十一トントラック六百台分の砂入れ、フェニックスの植え込み等のほかは、島の設備といえば簡素なトイレとシャワーとして使う汲み上げ式井戸が三つ。あとは貸テント、ランプ、飯合などの用具が管理小屋に準備されているだけです。

そんな無人島がこれだけレジャー客に受けたことに新しい地域おこしの方向を感じます。世はまさに飽食暖衣の時代。「節約」とか「もったいない」という日本人の美德であったはずの言葉は、すでに死語となっています。それだからこそ、この島に来て、

テント一つに支給されるポリ容器一杯の水だけで自炊し、日没と共にやすむといった生活は、忘れかけていた人間らしさを思い出させるのかもしれない。友人の中学生の息子さんや運動クラブの二泊三日の合宿でロザリオ藍覧土に行ったそうだが、帰ってきたとき「開口一番、「お母さん、水のありがたさがわかったよ。」と言ったそうなんです。そして、夜空にきらめく星の美しさは一生忘れないだろうと目を輝かせていたという話を聞いて、胸が熱くなる思いがしました。

